

きらきら、海の Santiago さん、
あなたはいったい何かしら？

— 3つのリフレインに導かれての論考 —

出 原 博 明

(1)

この作品の題名が、*Santiago and the Sea* でも *Santiago and the Marlin* でもなくて、極めて一般性の強い2つの名詞から成る、*The Old Man and the Sea* となっているところにも、普遍性をめざす作者の姿勢が窺える。題名のみならず、物語の展開そのものの中でも、Santiago という具体的な名前が示されることは稀で、彼の相手の marlin の方も、定冠詞による特定はあるものの、意味範囲がより一般的で広い (the) fish という名詞で表わされることが殆どである。

この作品をテーマにした論文の数はおびただしいが、the old man と the sea と the fish が内示しているものは何か、ということに注意を向けた追究が多いのは、一つには、上記のような理由によるのではないかと考えられる。また、この作品が寓意を読み取られがちなのも、このことと無縁ではないだろう。

同時に、Santiago は、素直に、文字どおりの「漁師」として読まれていることが、意外に少ない。

確かに、作家が韜晦することはよくあることなので、彼らの発言をいつも鵜呑みにするのは問題があるかもしれないが、ちなみに、作者の Hemingway 自身は、「the old man は the old man 以外の何者でもない」と明言して、symbolism を意図したことも否定している。¹⁾

この 'the old man' とは、いうまでもなく、the fisherman としての Santiago のことである。

そして、この小論の目的は、漁師 Santiago を、素直に、「漁師」として、読み解き、作品の真実に迫ろうとするものである。

この「素直な読み」の作業に取りかかる前に、Santiago を、文字どおりの「漁師」以外の何か、として読んだ解釈のいくつかに、目を向けておこう。

まず、「Santiago=作家 (Hemingway), the marlin=作品, the shark=批評家たち」という受け取り方がある。これは、この作品が世に出た当時から既にあるもので、Young も、漁師として扱いながらも、この見方をつけ加えている。²⁾ そして、この視点を更に徹底させたのが、Price の、*Santiago, The Fisherman - artist*, である。

このような読み、の出てくる背景のひとつに、この作品の書かれた時に作者が置かれていた状況、というものがある。というのは、怪我や年をとったことなどで体力が衰えてきていた Hemingway は、これの前作 *Across the River and into the Trees* を発表した際、これを失敗作と見做され、批評家たちからさんざんの悪評を被った、といういきさつがある。そして、この作家の活動時代はもう終わった、とさえ考えられていた。のみならず、この作家が、これまでも、批評家を激しく批判する、ということも珍しいことではなかった。だから、これらのことを踏まえて、つまり、テキストの外側のコンテキストの中でこの作品を読むならば、既述のような図式的見立て、が必ずしも成り立ち得ないわけではない。ただ、文学作品を評価する場合にそのようなコンテキストに重きを置き過ぎることには、問題が残るだろう。

... And when the reader of *The Old Man and the Sea* boards Santiago's skiff and vicariously joins the old man's fight with the fish and knows the ebb and flow of the aged fisherman's physical and emotional involvement in his work, he has the opportunity to learn, via a symbolic rendering, of one man's experience as a writer of fiction.³⁾

Price は、この主張を支える夥しい数の証例を作品の中から捜し出している。この他にも、主だった批評に、Santiago を、英雄とか超人とか神話伝

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

説上の王、として見るものがある。また、この漁師に、イエス・キリストのイメージを重ねるもの、彼を、中世的騎士道の体現者と見做す読み、などもある。

さて、主人公 Santiago は、上記のように漁師以外のものに見替えて解釈されがちではあるが、少なくとも作品の中の字句通りに受け取るかぎりでは、紛れもなくプロの漁師である。何故それ以外のものに読み替えられがちになるかという理由については既に言及したが、とりあえず、漁師としての Santiago のイメージを、その実際の言語表現に忠実に辿ってみよう。Leo Gurk が、この追跡劇のクライマックスとして位置づけている、巨魚が初めて美しい姿を現わす場面、までのそれを。⁴⁾ Santiago の実像に迫るためのこの追究の手がかりとして、主要な3つのリフレイン、を拾いあつめながら。

Hemingway が、若き日のパリでの作家修業時代に、Gertrude Stein 女史から「繰り返し」の技法を学んだ、ということは周知のことであるが、ここでいう3つのリフレインというのは、具体的には、「極端な遠出」と「少年への思慕」と「魚を殺生することへの弁解と謝罪」、である。

但し、上記の作業にはいる前に、この作品の方法で、リフレイン以外の特質の若干について簡単に触れておくことにする。

まず、Santiago が漁師であることが、He was an old man who fished alone in a skiff in the Gulf Stream and he had gone eighty-four days now without taking a fish.⁵⁾ と、ナレーションのかたちで示されている。

ここで既に判明するとおり、この作品は、話者が語る、という形をとっている。しかし、この話者は、読者に物語を語り伝えるという役割を担っているわけだが、だからといって、けっして「全知」の立場を取っているのではない。彼は、しばしば、舞台裏へ身を隠してしまい、主人公の考えや独白が舞台の前面へ押し出されてくる。かといって、いうまでもなく、主人公の視点を主な媒体として物語の展開が伝わってくるという仕組みになっているわけではない。この場合の話者は、a limited omniscient narrator、つまり不

完全知の話者、の立場にいる、といえるだろう。のみならず、語り手と Santiago との関係が、Sheldon N. Grebstein も指摘しているように、陸上にいる間と海上とでは、ちがっているのである。⁶⁾ つまり、陸上では、語り手がおおくは外側から見て、この老漁師について、われわれに語ってくれる。ところが、いったん海に出してしまうと、語り手と Santiago の意識とが微妙に混り合いはじめる。ときに、語り手が我々の目の前から完全に姿を消してしまう、ということも生じるようになる。

既述の3つのリフレインは、すべて海上でのみ現われる。(尤も、陸に帰ってきた Santiago が、海上でのリフレインの1つについて少年に告白することはあるのだが)

このことは後で取り組むとして、言葉そのものは、いずれの場合であれ、語り手も主人公もそのほかの人物も、平明で簡潔な parole を使用している。最終近くの観光客のセリフは例外として、作中の独白と会話のすべてがスペイン語で発話されており、それを英語になおして伝えている、という前提になっている。*For Whom the Bell Tolls* においては、スペイン語の発話をややふるめかしい英語で表現して効果をあげているのだが、⁷⁾ 当作品では、現在実際に使われている英語に換えられている。そして、それらは、スペイン語風に簡略化されたものになっている。

キューバ人である Santiago を、ラテン文化特有の、中世に根をもつ騎士道的なモラルの体现者と見做す解釈は、たとえば Robert M. Hogge のように、勇気と名誉を重んじる中世以来のラテン文化への Hemingway の傾倒を踏まえている。それへの Hemingway の姿勢については、*The Sun Also Rises* の Romero や真の闘牛愛好家についての評価、*For Whom the Bell Tolls* の勇敢なゲリラたち、への共感など、彼の実生活も含めて、それを証明するものは枚挙にいとまがない。そして、その文化の共有者の一人として、ここに、Santiago はいる、というのである。

ところで、Santiago には、気のふれたロシナンテの主人ほどではないにしても、やはり、非日常の世界にコミットしがちな性向が窺える。彼は、一

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

度ならず、‘I am a strange old man.’、つまり、並ではない変わり者の老人である、と述懐しており、また、自分を慕う少年 Manolin に向かって、‘If you were my boy I’d take you out and gamble,’ (9)、つまり、一か八かの冒険を試みるのだがなあ、という気持ちを吐露している。若い頃は船でアフリカまで行ったし、一昼夜にわたる激闘の末に、無敵を誇っていた腕相撲のチャンピオンを倒したこともある。プロの漁師としてのこれまでの戦果も、かくかくたるものようだ。平凡で日常的な枠のなかに自足できるような人物ではなかった。現在でも、大変な老齢にもかかわらず、そして、目に害を及ぼしながらな海亀捕りにしばしば従事してきたにもかかわらず、彼の目はよく見えるし、一か八かの無鉄砲な行動に出てみようとおもうほどに猶も意気軒昂である。

この老漁師は、もう 84 日間も一匹の魚も釣れないという状態にあって、明日はその 85 日めに当たる。そして、彼によれば、85 は lucky number だから、きっとその日は大きな獲物を釣り上げることができるにちがいない、と考えている。以前にも 87 日間の不漁のあとで 3 週間も大漁に恵まれたことがあった。このように迷信にこだわるのも漁師の特性のひとつであるが、Hemingway の場合、たとえば *For Whom* の Pillar の palmistry のように、作品の中に迷信が要素としてよく使用される。

この老漁師は、上記の数の迷信と自分の予感を踏まえて、85 日めの早朝から賭に出ることになる。少年と離れ離れになったままの、孤独な冒険、の試みである。彼は、まだ暗いうちから海上に小舟を進ませながら、プロのベテラン漁師として、目的の達成を目指して次々と記号を読み解いていく。

たとえば『ばらの名前』の僧院のように閉じられた世界ではなくて⁸⁾、彼の舞台は、海上という、壁ひとつない開かれた世界である。『ばらの名前』の William のような中世人でもなければ、彼のように学識と卓越した推理力があるわけでもないが、彼の風貌の中のシミや傷痕などの記号が証明しているように、Santiago は、漁師として豊かな経験を積み重ねてきており、海色の瞳が象徴しているように、老齢にもかかわらず、まだ精神が不屈で、

若々しくてアラートである。

このキューバ人は、もてる能力を全開して、自分の運命に立ち向かっていく。

彼は、船出を手伝いに来てくれた少年に、‘I feel confident today.’ (23) と告げる。そして、彼は、闇から明、夜明け前の時間から日の出、に向かって小舟を漕ぎ出していく。

この物語の構造は、いわゆる journey-pattern を描いている。つまり、主人公が或る拠点から離れてどこか遠いところでさまざまな経験をしたあと再び元の拠点へ帰ってくる、という経過をたどっている。この場合、主人公にとって、陸が閉ざされた世界であり、海が開かれた世界である。⁹⁾

このパターンを踏まえて、陸上が現実で、海上の出来事は ‘illusion’, という見方をする解釈もある。¹⁰⁾

さて、既に指摘したとおり、この小論の手がかりとする3つのリフレインは、いずれも、これからの海上の時間の中で見られることになる。そこで、「遠出」「少年への思慕」「魚の殺生への弁解と謝罪」の順に、それぞれのリフレインとそれにかかわる問題を、以下、追うことにしよう。

先ず、「遠出」について。老漁師は、今日は「遠出」をする、という決意をしており、陸の匂いを背後に残して、早朝の海の清らかな匂いの中へ、と漕ぎ進んでいく。そして、漁師たちが「深い井戸」と呼んでいる、あらゆる種類の魚たちが集まってくる領域を越える。くらがりの中で、彼は、朝が近づいてくるのを感じることができたし、飛び魚たちが水面から飛び立つ時の顫音を聞くこともできた。ここは、feel と heard, と感覚動詞がつづく。のみならず、…he left the smell of the land behind and rowed out into the clean early morning smell of the ocean, …’(25) には感覚動詞はないが、smell という名詞がくりかえされており、内容が感覚的である。とりわけ、rowed out into the clean early morning smell of the ocean では、臭覚をとおしてだけではなく、匂いが肌身に直にしみ込んでくるようだ。in the

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

dark, という句も、コンテクストからいって、感覚的である。

Hemingway 自身、感受性が鋭く、よく知られているように、幼少時代に野生に親しむことをおぼえ、それが生涯続いた。¹¹⁾

彼の作品には、bookish な知識ではなくて、鋭敏でみずみずしい動物的な知覚をとおして学習する人物がよく登場するが、彼らは、自然の中に身を置く時、水を得た魚のようにいきいきしてくる。そして、fishing や hunting も含めて、肉体的に行動することが好きだ。作者と主人公が同一ということはないが、こり作家の場合、どうしても、当人の実人生での生き方と主人公のイメージが重なることが多い。たとえば、Nick Adams の背後から、釣りざおや猟銃を持って大自然の中を駆けずり回る、野生動物並みの聴覚と視覚を具えた作者の姿が浮かんでくるのである。そして、Santiago を、作者の分身ともいうべき Nick の延長線上に位置付ける解釈も珍しくない。¹²⁾

かつて、T. S. Eliot は、このユニークな文学者について、表面は反知性的にみせかけているが実際は非常に高い知性の持ち主だ、という意味の批評をしている。確かに、Hemingway は、今世紀の作家の中では珍しく、高校卒だけの学歴であったが、その学生時代は秀才であったし、世に出てからも、並みはずれた読書と経験をとおして、多くのことを独学で学び取っている。ヨーロッパ滞在中は、美術館の熱心な訪問者でもあった。¹³⁾ 天与のものも、優れた頭脳と頑健な肉体だけでなく、音楽の才能などの情操面でも恵まれていた。彼が知的で、知識も豊富であった、ということは否定できない。しかし、この作家の作品の中で、bookish な知識というものを前面に押し出したものは殆ど見当たらない。作家や大学助教授を主人公や登場人物にしたことはあるが、その場合でも、bookish な知識は表面には出ていない。T. S. Eliot が指摘したように、彼が、あえて反知性のポーズを取ったかどうかはともかく、けっしてペダンチックになることはなかった。

小舟の上の Santiago も、全神経を集中して記号を読み取ろうとしているのだが、anti-bookish で anti-pedantic という点では、『ばらの名前』の

William とは程遠いところにいるのである。海上のか弱そうな小鳥を見て、彼は考える：‘The birds have a harder life than we do except for the robber birds and the heavy strong ones. Why did they make birds so delicate and fine as those sea swallows when the ocean can be so cruel? She is kind and very beautiful. But she can be so cruel and it comes so suddenly and such birds that fly, dipping and hunting, with their small sad voices are made too delicately for the sea.’(26)

彼は、「遠出」を敢行しつつあるのだが、同時に、海の怖さをも知っていることが、ここに示されている。

それでも、海は、彼にとっては、女性名詞の ‘la mar’ であり、「おんな」であり、豊かな恵みをめぐんでくれる何者か、である。彼は、モーターボートを乗り回す若い漁師たちのようには、それを自分たちと敵対するものとして ‘el mar’ と男性名詞で呼ぶことはできないのである。海が乱暴をはたらくことがあっても、それは、やむを得ずにそうなるのだ、と彼は思う。月は、女に対してと同じように、海にも影響を及ぼすのだ、と。

しかし、にもかかわらず、後でわかるように、Santiago は、心ならずも、「極端な遠出」をして、この偉大な「おんな」の聖域を侵してしまい、怒りを買ってしまうことになるのである。

彼は小舟を進める仕事の3分の1を潮の流れにさせながら漕いでいき、明るくなりはじめた頃には、すでに、望んでいた以上に遠くへ出てきてしまっていた。彼は、今日は、カツオとビンナガの群れのいるあたりにでっかい奴がいるだろう、と見当をつけている。そして、まだ十分に明るくならないうちに、細心の注意を払って餌をつけた4個の釣り針を、正確な位置に仕掛ける。1番目は40ファゾム、2番目は75ファゾム、3番と4番は100ファゾムと125ファゾム、の深さにそれぞれ設定した。

ここで、それぞれの網の太さは、大きな鉛筆ほど、という比喩で表現されている。そして、この比喩は、Santiago が作家としての Hemingway を意味している、という主張を裏付けるしるしのひとつだ、とする見方もあ

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

る¹⁴。それはともかく、Santiago は、狙ったとおりの位置に垂直に下りた状態に、それらの綱を保つように工夫する。これらのことは、彼がベテランのプロ、というだけでなく、如何に真摯な漁師であるか、ということを表わす記号でもある。

太陽がわずかに顔を出して [The sun rose thinly from the sea], 老人は、ほかの釣り船を目にすることができたが、それらは波間に隠れるように低く、ずっと海岸寄りの位置に漂っていた。そして、太陽が輝きを増して海面をぎらつかせ始めると、その反射光が目を痛めるので、彼は、それを見ないように気をつけて、漕いだ。彼は、水中に視線を向け、餌が望ましい位置からそれないように、綱を垂直に保ち続けた。他方、ほかの漁師たちは、綱が潮の流れに押されるままにするので、彼らが100ファゾムの深みにあると思いこんでいる時に、実際は、餌は、60ファゾムのところにある、ということが間々起こるのである。

この比較も、老人が、並の漁師とは違う、ということを示す記号のひとつである。

太陽が、2時間分、のぼった。もはや、東方を見つめても大して目を痛められることはない。そして、今や、視界に入る釣り船は、3隻だけになっていた。それらは、ずっと沿岸寄りに、とても低く、見えていた。(ということは、老人が更に「沖合」へ出てきている、ということになる)

ここままで、既に、老漁師 Santiago が、「遠出」という、他の同業者たちとは異なった行動をとっている、ということが何度も明示されている。

彼は、功名心が強く、人並みはずれた野心家である。だから、巨魚をねらっている。巨魚に出会うために、「深井戸」という領域さえ越えて、他の漁師たちはやって来ない、「はるかな沖合」への遠出、を敢行するのだ。(彼が、後で、何度も繰り返すように、本当に生活のためにだけ魚を釣るのであれば、何も特に巨魚のみを狙う必要はないはず。明らかに、自分が非凡な漁師である、という意識が強くて、喝采を求める功名心が、彼にはある)

彼は、内心、自分の目の良さを自慢する。これまでの生涯、早朝の太陽に

目を痛めつけられてきたのにもかかわらず、まだまだ良好なのだ、と。そのとき、前方で軍艦鳥が旋回している、のが見えた。その鳥が、急降下して何かを獲った。彼は、それが旋回している領域へ、ゆっくりと確実に、小舟を近づけていった。それは、再び急降下した。そのとき、老人は見たのだ。飛び魚たちが、海面からとび出して、海面の上を死にもの狂いで飛んでいく、のを。そのすぐ下の海面がわずかに盛りあがり、かれらを、シイラ (dolphin) の大群が追っかけているのがわかった。それらは、あまりにも速く、あまりにも遠くへ、去っていく。

この光景は、老人にとっては一つの記号であり、彼は、俺は、はぐれものを捕まえることになるだろう、そして、俺の大魚はあいつらのいるあたりにいるだろう、と判断する。

ここで、再び、彼がすでに如何に「極端な遠出」をしてしまっているかということと、獲物に出会えそうだ、ということを示す記号への言及がある。つまり、今や、陸地は、灰青色の山々を背負った一筋の緑色の線にすぎないもの、となっている。この辺りの海水の色は、紫色といってもよいくらいに濃い。その水中には、たくさんのプランクトンがいて、そのことは、そこに魚がいる、という証拠でもある。太陽の光が作り出す水中の奇妙な明るみも、陸地の上にかかった雲の形も、良い天気を約束している。(これは、いかにも、漁師の世界だ)

漁師の仕事にとって貴重なこのような記号、の他に、海の生き物たちの生態が、親しみをこめて生き生きと描かれる。ここにも、漁師ならではの、観察と把握が窺える。

いつの間にか、小鳥は姿を消しており、彼の小舟の近くには、ホンダワラとカツオノエボシが漂っているだけだ。そして、後者は、マイナスのイメージを与えられている。後に登場することになる鮫たちほどではないにしても、こちらに害を及ぼす生き物の一つとして提示、されているのである。そのもっている毒性に触れると、人間の皮膚は、たちまち、みみずばれになったり、ただれたり、する。しかし、それは、あくまで、人間にはそれに対する

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

免疫がないからで、現に今も、この生き物が曳きずって漂わせている細糸の間を泳ぎ回っている小さな魚たちは平気である。海亀たちも、被害をこうむることはない。そして、老人は、海亀たちが目を閉じてこの生き物を食べてしまうのを、見るのが好きであった。

老人にとってはマイナスとなる生き物についても、'Agua mala' とののしりながらも、同時に、このように、エコロジ的な調和の中の一つの存在、としても捉えている。(ここには、海の生物たちと共存していく、プロの漁師の目がある)

また、漁師としての老人の、海亀たちへのおもいも、いくらかのユーモアを添えて、語られる。たとえば、彼は、台風一過の浜で、亀たちの背中に乗り、それらがポンという音を出すのを聞くのが好きだった。亀の心臓は、切り裂かれほふられた後も鼓動を打つのだが、老人は、自分もそのように丈夫な心臓の持ち主であり、彼らのような手足を自分ももっている、と考えている。老人は、9月と10月の漁期の大魚に備えて体を強くするために、5月の間中、亀の卵を食べる。また、老人は、それが風邪やインフルエンザを防いでくれるし、目のためにも良いので、毎日、ほとんどの漁師たちがその味を嫌がって避ける鮫の肝油、を飲む。

ここでも、彼が、プロの漁師として、並の多くの漁師たちと違っている、ということが強調されている。

さて、老人が目を上げると、あの鳥が再び旋回していた。その下には、餌食の魚を追ってかけている、鮪 [tuna] の群れがいた。そして、パニック状態になって海面にでてくる餌食の魚を、鳥が襲う。老人は、漁師として、鳥を何かと手がかりを与えてくれる記号として、読む。

'The bird is a great help,'(35) と言ったとき、舳に仕掛けた綱に引きが来て、彼は、10ポンドほどのビンナガマグロ [albacore] を釣りあげる。その魚の容姿と彼の、いかにもプロの漁師らしい、手際の良い処理の仕方が、かなり克明に描かれる。"The Big Two-hearted River" においてこの技法は特に顕著であるが、Hemingway は、特定の行為を、いかなる説明をもは

さむことなしに、たんとと克明に描写する。

あのマグロの群れの辺りにでっかい奴がいるかもしれないのだが、と彼は考える。それにしても、何故か、魚たちをはじめ、海面に姿を現わす生きものたちは皆、北東の方角に向かって、すごいスピードで移動しているのだった。Can that be the time of day? Or is it some sign of weather that I do not know? (37) 流石の老人も、この記号は、十分に読み解くことができない。

もはや、あの緑色の海岸線は水平線下に隠れ、山脈の頂とその上の雲だけが見えている。この記号によって、彼が、先刻よりも更に「遠出」をしてしまっている、ということが判る。

高くのぼった太陽の光線を浴びて、無数のプランクトンの姿は消滅していた。首の後ろに日差しを浴びて、彼は、汗が背中を滴り落ちるのを感じた。この太陽の高さと温度の記号から、正午前後ではないか、と読者は時間を判断することができる。

突き出した緑色の棒のひとつが鋭く下がる。

この記号を、老人は素早く読み取り、權を収める。この時点から、彼と魚との、息詰まるようなかけひきが始まる。勝負は、相手と状況との記号を如何に読み解き得るか、ということに、おおきく懸かっている。これは、彼がどの程度の漁師であるか、が試されるチャンスでもある。

Santiago は、相手を、陸から遠く離れた深海に棲んでいる魚だから大きいに違いない、と考える。これ程までに「遠出」をすることなしには、これほどの巨魚にはめぐり合えない、のである。

それにまつわる危険については、語り手も何も言わないが、「如何に遠くへ出てきているか」ということは、繰り返し示される。

結果的には、この「極端な遠出」が要因となって、後に、老人を打ちのめす事態が発生するのだが、彼自身の気持ちには、この段階では、そういう結果への危惧は未だみられない。しかし、ここからの視界には、もはや、ほか

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

の釣り舟は見当たらない。彼以外の漁師たちは、こんなに遠くまで出てこようとはしないのだ。つまり、彼は、並の漁師たちの行動様式から離れたことをしている。ということは、彼は、やはり、自分でもいっているように、‘a strange old man’(10)、である。

‘What a fish,’ he said. ‘He has it [the tuna:the bait] sideways in his mouth now and he is moving off with it.’

Then he will turn and swallow it, he thought. He did not say that because he knew that if you said a good thing it might not happen. He knew what a huge fish this was and he thought of him moving away in the darkness with the tuna held crosswise in his mouth.(40~41)

Santiago は、水深 600 フィートの暗がりにいる魚の動静を、わずかな記号を手がかりにして、このように推理する。

彼は、指の間から綱を滑りださせながら、左手を使って、予備の綱をつなぎ合わせていく。そして、今使用しているもののほかに、40 フェザムの綱 3 巻を用意する。

‘Now!’ ここぞ、という瞬間を捉えて、彼は、力を振り絞って、相手を引っかけることに成功する。しかし、魚は、何事もなかったかのように、悠然としている。

The fish just moved away slowly and the old man could not raise him an inch. His line was strong and made for heavy fish and he held it against his back until it was so taut that beads of water were jumping from it . . . (42)

ここから、老人と大魚だけの「長い旅」が始まる。ということは、陸から更に「遠く」へ離れていく、ということの意味する。

Santiago が魚を釣り針に引っかけるのに成功したのは正午頃だった。それから4時間後も、魚は、まだ、舟を引っ張って、北西の方角に向かって、悠然と、旅を続けていた。老人は、綱を肩にかけ渡して、相手の牽引に耐える。

ふと振り向くと、陸は、後方の彼方に姿を消していた。それでも、大丈夫だ、と老人は考える。いつものように、ハバナの灯明りを頼りにして帰っていけるじゃないか、と。

日没までには、まだ2時間ほどあった。日没よりも前に、たぶん、奴は上へあがってくるだろう、と彼は判断する。若しそうでなければ、月の出と一緒に、それも駄目だった場合には、明日の日の出と共に、と。

しかし、彼のこれらの予想は、後で、ことごとく覆されてしまう。

彼が最も遅れた場合の可能性として設定した翌日の日の出どころではなく、翌日の丸一日とその夜も含めて、魚は、上へあがってくることにはならなかったのである。(2日めに1度だけ、海面をやぶって跳躍してみせるのだが、これは、ここでの「上へあがってくる」の意味するところとは異なる)

当然、魚との旅も更にえんえんと続いたので、「陸からの距離」は、到底、大丈夫といえるものではなくなってしまふ。

プロの漁師としての彼の判断の的中率の低下に反比例して魚の偉大さが増大する。魚のほうが、老人よりももっと 'unusual' で 'strange' というイメージになりかねないほどだ。

But what a fish to pull like that. He must have his mouth shut tight on the wire. I wish I could see him. I wish I could see him only once to know what I have against me.(44)

ここには、まだ見えていない魚に対する老人の驚きが現われている。そして、彼は、かつて経験したことのないようなこの相手の記号を読み取りかねて、戸惑ってモいる。

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

夜になると寒かった。ハヴァナの灯明りがあまり強くない、ということから、老人には、潮の流れが彼らを東方へ運んでいる、ということが、判った。

2匹のネズミイルカが船のそばへ来て戯れあうのだが、彼は、雌と雄の音を聞き分けることができるのだった。この番いに親しみを覚えながら、彼は、自分が引っかけた巨魚に同情しはじめる。同時に、巨魚への感嘆を繰り返し、魚ゆえの限界をも読み取る。

He [the fish] is wonderful and strange and who knows how old he is, he thought. Never have I had such a strong fish nor one who acted so strangely. Perhaps he is too wise to jump. He could ruin me by jumping or by a wild rush.(46)

Santiago は、更に、「肉質が良かったら、市場でいくらの値段がつくだろうか」と、この魚の肉がもたらしてくれそうな物質的な利益、について考える。野球と同じく、彼は、これから先も、何度も繰り返して、この利益に言及する。プロ野球の試合の結果と自分が釣った魚の値段、への関心、——これは、漁師としての Santiago のイメージに、生々しい現実感覚を付与するのに大いに与っている。適時に随所に挿入されるこの要素が欠けていたら、この作品は、もっと現実遊離の度合いの強いものになっていたにちがいない。この老人を英雄や超人や神話上の人物、と見做す解釈についてはすでに言及したとおりだが、そもそも、彼の名前 Santiago とは、St. James の意味であり、彼を聖徒の一人、と考えることもできないわけではないのだ。

His [the fish's choice] had been to stay in the deep water far out beyond all snares and traps and treacheries. My [the old man's] choice was to go there to find him beyond all people. Beyond all people in the world.(48)

老人と魚は、陸からも「遠く遠く離れた」、他者の介在を一切許さない、2者だけの世界で、1対1の対決、を続ける。どちらにも、力を貸してくれるものはいない。

二日目の太陽が水平線から覗き始めた時、それは、老人の右肩の方であった。ということは、魚は、なお、北の方角を指して進んでいるのだ。潮は東に向かって流れているのだから、それに押し流されていない魚は、まだ、疲れていない、ということになる。

こうして、この老漁師の「遠出」は、途方もない極端なものになっていく。

次に、彼の「少年への思慕」のリフレインを辿ってみよう。

先ず、少年が親の命令で他の船へ去った頃から、老人は一人だけのときにひとりごとを言うようになったのだ、というのである。ほかの人が聞いたら、気違い、と思うだろうな、と彼は考える。

彼は、餌の食い方、引っぱり方、闘いぶり、といった記号から、この巨魚は雄である、と判断する。そして、彼は、かつて、少年と一緒に、カジキマグロの番いの、雌の方を釣り上げた時の、悲劇的な情景を思い出す。

'I wish I had the boy,' the old man said aloud. 'I'm being towed by a fish and I'm the towing bitt. I could make the line fast. But then he could break it. I must hold him all I can and give him line when he must have it. Thank God he is travelling and not going down.'(42)

ここでは、少年の存在が、彼にとって如何なるものであるか、が暗示されているのだ。Santiago は、愛弟子の少年を求めている。

彼が愛弟子を希求するこの声は、これからも、何度も何度も繰り返される。そして、このことは、例えば Brenner のように、老漁師の冒険は、Manolin 少年を、血縁の父親と現在の彼の親方役の父親、の両方から奪い返すための、起死回生をねらった行動である、¹⁵⁾ という読み、を引き出す根拠のひとつにもなっているのである。

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

なお、Mayers も指摘しているように、この頃、Hemingway自身が息子たちに背かれてさみしい境涯に陥っていた、¹⁶⁾ という背景を考えると、ここでの老漁師と少年の関係は、一層興味深いものに思われる。

ハヴァナの灯明りがあまり強くない、ということから、老人には、潮の流れが彼らを東方へ運んでいる、ということが、判った。

Santiagoのおもしろいところは、こんな時に、今日の大リーグの野球はどんな結果になっただろう、などと考えるところである。だが、すぐ、彼は、「今やっていることを考えろ」と、自分自身を叱りつけて、次のように、「少年を希求する」あのリフレインを繰り返す。

‘I wish I had the boy. To help me and to see this.’(45)

彼は、年を取ってから独りぼっちになるべきではない、とも考える。

カジキマグロの夫婦の妻の方を少年と一緒に釣り上げた時のことを思い出し、また「あの子がいてくれたらなあ」と、おもう。(47～48)

もう一つの仕掛けに別の魚が引っ掛かってこの巨魚の綱を切ったりすることにならないようにそれを切っておこう、と彼は考える。すべてを、この一匹の魚との戦いに賭けるのである。そして、「あの子がいてくれたらなあ」というリフレインを口にするが、すぐに、今は、お前だけしかないんだ、と自分に言い聞かせる。(49)

二日めの今日、老人は、再び、魚の突然の突進によって、引き倒される。その騒ぎで、それまで老人が話しかけていた小鳥も姿を消す。ここでも、「あの子がいてくれたらなあ」というリフレインが繰り返される。(53～54)

最後に、「魚の殺生への弁解」のリフレインを拾ってみよう。

魚が深部から僅かに上方へ位置を移した、と分かったとき、老人は、魚に向かって、「今日のうちにお前を殺してやる」(52)と言明する。

(尤も、現実では、プロの漁師としてのこの判断も覆されてしまい、勝負は、翌日、即ち、海上での三日め、に持ち越されるのだが)

右手に代わって綱を握っていた左手に、魚が強く引いたとき、ひきつれが起きる。それを治すために、彼は、カツオを食べる。が、ひきつれは、なかなか治らない。

左手がひきつれたまま、老人は考える。「奴は、おれの兄弟だ。なのに、おれは、奴を殺さねばならぬ。」と。(57)

自分にとって兄弟なのに殺さねばならぬ、という老人のこの二律背反の気持ちは、これから先も、何度も、リフレインの一つとして繰り返される。

そして、このリフレインは、後に鮫の襲撃を受けるに至り、この行為への悔恨と謝罪というヴァリエーションとなって、更に頻繁に繰り返されるようになる。

さて、彼は、手のひきつれがいつまでも治らないのを嘆いて、少年を求めるあのリフレインをまた繰り返す。「あの子がいてくれて、この左手をマッサージしてくれたらなあ」(60)

老人は、健全な右手で、魚の引きが変化したのを感じ取る。綱の傾斜が、ゆっくりと、上方へ揚がってくる。そして、遂に、魚が、姿を現わす。(これが、既に言及した、Gurko も climax と呼んでいる、問題のシーンである)

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

The line rose slowly and steadily and then the surface of the ocean bulged ahead of the boat and the fish came out. He came out unendingly and water poured from his sides. He was bright in the sun and his head and back were dark purple and in the sun the stripes on his sides showed wide and a light lavender. His sword was as long as a baseball bat and tapered like a rapier and he rose his full length from the water and then re-entered it, smoothly, like a diver and the old man saw the great scythe-blade of his tail go under and the line commenced to race out.

‘He is two feet longer than the skiff,’ the old man said.(60)

これほどの巨魚を、彼は、見たことがなかった。この劇的な光景の緊張感を高めるのに、これまでのサスペンスの積み重ねが効果を上げているのは言うまでもないことだが、左手がひきつれを起こしたままで老人が不安定な状態にある、ということもその一つだろう。他に、その時の、陸からの距離が、季節上の状況とともに、それに大いに与っている。つまり、今や、まったく「陸が見えないほど遠く」へ来ており、しかも、今がハリケーンの季節だということが、この場面の寸前に、示されている。尤も、ハリケーンの季節にもかかわらず、好天気、吹いている風もそよ風 [light brisa] であり、ハリケーンが近づいているという徴候はない、と付記されてはいるのだが。しかし、普段ならともかく、ハリケーンの中の晴天、というものには、やはり、不安を掻きたてるものがある。(事実、老人が帰った日、海が荒れすぎて、その漁師町は休漁になる) しかも、老人は、そういう状況のもとで、ひとりだけ (少年を伴わない) で、「途方もない遠出」をしてしまっているのだから。

これは、ある意味では、何かの禁を破っている、ということでもある。

更に、この場面に基づく重要な問題の一つは、はじめて見る魚の身の丈が、舟より2フィートも長い、ということが判明した、ということである。つまり、それは、この魚を仕留めることができても、それを舟に積むことはでき

ない，ということをして老人に認識させる記号でもあったのだ。だとすると，「途方もない遠出」をしてしまっているのだから，帰還するには「途方もない時間」がかかる筈であり，この段階で Santiago は，当然，帰途に，100 パーセント，鯨の襲来の犠牲になる，という予測を立てなければならぬはずである。

(2)

... the long backbone of the great fish that was now just garbage waiting to go out with the tide.(127)

前章の最後の引用部分，ある意味では追跡劇のクライマックスともいえる場面，で初めて美しい姿を現わしたあの巨大なカジキマグロは，翌日，つまり，三日目の昼頃に Santiago の手で遂に仕留められたあと，一時間ほど経ってから，次々と鯨たちに襲われつづけて，遂に，上記のような残骸，になってしまった。その襲撃の先鋒は，mako [dentuso] という種類の鯨で，次のような歯の持ち主である。

Inside the closed double lip of his [the shark's] jaws all of his eight rows of teeth were slanted inwards. They were not the ordinary pyramid-shaped teeth of most sharks. They were shaped like a man's fingers when they are crisped like claws. They were nearly as long as the fingers of the old man and they had razor-sharp cutting edges on both sides.(100)

Brenner は，巨魚の肉を食いちぎるこの鯨の歯に，プロメテウスの肝臓を食いちぎる鷲の鉤爪 [talons](181) を読み取っている。¹⁷⁾ だが，巨魚または Santiago を，必ずしも，プロメテウスとして見立てているわけではない。彼は，「Oedipus 王伝説」を踏まえて，老漁師が巨魚を引っかけてからの経過を，巨大な 'phallus' (the fish = the phallus) によって母 (the

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

sea=mother) を犯しているのだ、と解釈する。また、Santiago が巨魚を仕留めた、という行為を、‘parricide’ [父殺し] の罪をおかした、と受け取る。つまり、この物語に、‘parricidal fantasy’ とエロチックな ‘incestuous fantasy’ を重ね合わせている。¹⁸⁾ そして、mako [dentuso] 鮫とそれに続く、はるかに醜くて獰猛な galano 鮫の襲撃は、復讐の ‘castration’ の儀式、というわけである。

The shark closed fast astern and when he hit the fish the old man saw his mouth open and his strange eyes and the clicking chop of the teeth as he drove forward in the meat just above the tail. The shark’s head was out of water and his back was coming out and the old man could hear the noise of skin and flesh ripping on the big fish . . . (101)

‘just above the tail’ は ‘genital organ’ の場所なので、特に、そこの肉を食いちぎる、というところに、‘castration’ のイメージを読み取るのである。¹⁹⁾

ところが、これも、Price の解釈によれば、カジキマグロは作家 Hemingway の作品であり、それを食い荒らす鮫たちは批評家たちだ、²⁰⁾ ということになる。

Hogge にとっては、この場合の Santiago は、(中世的) 悲劇の英雄であり、十字架にかけられたキリスト、でもある。そして、その結果に、悲劇的カタルシスを見てもいる。²¹⁾ (Sailing with his stripped trophy, Santiago returns to Cuba while being apotheosized as a crucified Christ, an action which effects a tragic catharsis.)

Killinger は、Santiago と鮫たちの闘いの中に、“Indian Camp” 以来繰り返されてきた、死と暴力、のモチーフが、顕著に現われている、と指摘する。²²⁾

そして、一層興味深いのは、Grebstein が、この鮫の襲来の場面で、この

老漁師に、受難のキリストのイメージを露骨に重ね過ぎたのが、この作品の唯一の 'serious error' だ、と主張していることである。²³⁾

それは、mako の襲撃の後2時間ほどたって、2匹の 'galano' が姿を現わした時の場面のことを、いっている。'Ay,' he said aloud. There is no translation for this word and perhaps it is just a noise such as a man might make, involuntarily, feeling the nail go through his hands and into the wood. (107) というのがそれなのだが、ここで、注意すべきは、彼の叫び声がキリストのそれに似ている、といっているのは、語り手の側から、ということである。Santiago 自身は、そういうことには、われ関せずで、考えてもみなかったのであろう。また、これほど露骨な言及はないが、翌日の夜明け前に陸へたどり着いて、マストを担いで坂道をよろめき上っていくところや、掌を上向けにしてベットへ俯せに寝たところは、Young の指摘を待つまでもなく、²⁴⁾ キリストのイメージをほうふつさせずにはおかない。但し、これも、語り手の側からの語りの部分、での出来事である。

Mayers は、これに、物語の始まりの部分で Santiago がマストを担いで帰ってくる場面も合わせて、どちらの 'the Christian symbolism' も押しつけがましい、と批判している。²⁵⁾

他方、Santiago の側は、特に鮫に襲われはじめてからは、後悔と弁解の言葉が、目立つようになる。そこで、とりわけ繰り返されるリフレインは、「極端な遠出をしたのがよくなかった」(I am sorry that I went too far out. I ruined us both. (116), You [Santiago] violated your luck when you went too far outside. (117), And what beat you, he thought. 'Nothing,' he said aloud. 'I went out too far.' (121)), と「魚よ、お前を殺すべきでなかった」(I wish it had been a dream now and that I had never hooked the fish and alone in bed on the newspapers. (103), If you love him [the fish], it is not a sin to kill him. Or is it more? (105), 'I wish it were a dream and that I had never hooked him. I'm sorry about it, fish. (110)),

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

の2つに集約される。そして、いうまでもなく、後者は、以前の、「兄弟ではあるが、漁師であるおれは、お前をころさざるをえない」というリフレインと表裏をなしている。彼は、悔いや罪の意識に悩まされながら帰路を急ぐ。‘Don’t think, old man,’ と、何度も自分に言い聞かせるが、結局、彼は、巨魚に向かって、何度も詫びる。無益に、彼を引っかけたことと、極端な遠出をし過ぎた、ということ。例えば、有名な、‘A man can be destroyed but not defeated,’ (103) という科白のすぐ後で、I am sorry that I killed the fish though, he thought. (103) といって、すまながっている。それから、たとえば、‘I shouldn’t have gone out so far, fish, . . . neither for you nor for me. I’m sorry, fish.’ (110), というように、若干のヴァリエーションをもたせて、何度も、「後悔」と「詫び」を繰り返している。

また、彼は、希望をもたないのも ‘sin’ だと思うが、魚を殺すのも、そうではないか、と自問するようになる。そして、鯨に襲われるまでの彼は、漁師なので生活するために殺さざるを得ないから、とその行為を正当化していたのにもかかわらず、今や、この魚を自分の pride のためにも殺したのだ、と別の動機をも認めている。のみならず、彼は、‘I am too old to club sharks to death.’ (112) とか、I could not expect to kill them [sharks], he thought. I could have in my time. (115), のように、自己の、「老齡」ゆえの限界、を認識している。

鱧たちのすざましい襲撃と略奪を経験したあとの Santiago が、それ以前よりもはるかに謙虚になっている、ということは否定できないだろう。

上記のように、巨魚は残骸となり、Santiago が「後悔」と「詫び」のリフレインを繰り返さなければならなくなった原因は、いうまでもなく、彼自身のおかした「過誤」である。この老漁師を、超人や悲劇的英雄や聖人や神話伝説上の王やキリスト、に読み替えるような読みは、いささか、ロマンチックに過ぎはしないだろうか。尤も、文学批評において、神話のパターンや深層心理学の理屈を当てはめるのは、大方の常套手段ではあるのだが。この漁師は、冷静なりアリスチックな視点で、素朴に、漁師としてありのままに読

むならば、一風変わってはいるが、きわめて人間らしいプロの漁師以外の何者でもないのである。もし、A. Pope の詩句 'To err is human, to forgive, divine.' ということが真実であるならば、²⁶⁾ 彼は、紛れもなく、何よりもまず「人間らしい」、のである。(それに、彼の達成した業績程度では、とうてい、'superhuman' と考えるわけにはいかないのではないか)

さて、兄弟でも友でもある巨魚の肉のすべてを食いつくされたとき、精根尽きた老漁師は、呼吸も困難な状態になり、何か錫のような味のするものを嘔吐する。(この症状と最終場面でベッドに俯せになっている彼の姿から、もう2度と漁に出ることもなく死を迎えることになるのだ、とする、先走った解釈もある)²⁷⁾ そのあと、とにかく、彼は、欠損した舵棒を操って、帰路を急いだ。彼の舟は、重い荷物が無くなったので、軽快に走った。ここで注目すべきは、これほど悲惨な目にあいながら、Santiago が、少しも、といってもいいほどに、取り乱さなかった、ということである。敗れはしたものの、彼がすでに誓っていたように、これが 'undefeated' というものであろう。

そして、ここには、明らかに、Hemingway 自身の「理想」の投影が見られる。'undefeated' という、おそらくは普通の多くの人達が、人間としてこうありたいと願う「人間らしい尊厳」が示されている。

同時に、これは、明らかに、スポーツマンシップの理想でもあり、いかにも、Hemingway らしい姿勢が窺える。

ここには、何かからの開放感、と、何かを洗い流されたような清浄感、と、これで何かを赦されたという安らぎ、がある。湿り気が乏しく、むしろ、からっとしている。

Santiago は、この点で、Hemingway の意識の中で長い歳月をかけて発酵熟成してこの作品に結実することになる以前の、次のような、現実の事件の無名の主人公とは、闘いの結果への対応の仕方では、その正反対といってもいいほどに、大きくかけ隔たっているのである。

... Lashed alongside the sharks had hit him [a great marlin] and the

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

old man had fought them out alone in the Gulf Stream in a skiff, clubbing them, stabbing at them, lunging at them with an oar until he was exhausted and the sharks had eaten all that they could hold. He was crying in the boat when the fishermen picked him up, half crazy from his loss, and the sharks were still circling the boat.²⁸⁾

ところで、Killinger は、*A Farewell to Arms* の individualism を捨てて、*For Whom* と *To Have and Have Not* において “no man is an island” の思想を前面に打ち出した Hemingway は、*Across the River and into the Trees* と、この *The Old Man and the Sea* で、individualism に再帰した、といっている。²⁹⁾ しかし、後者については、実際には、そのようには言いきれないニュアンスがあるのではないか。そのことは、前章でも言及したエコロジーへの彼の思想の幾つかの実例だけでなく、この旅の終わり近くの Santiago の次のような思いにも、窺えよう。

The wind is our friend, anyway, he thought. Then he added, sometimes. And the great sea with our friends and our enemies. And bed, he thought. Bed is my friend. (121)

「わが友とわが敵の共存している偉大な海」、*「風はわが友」*、という内心のモノローグには、この老漁師の、自分も大自然の中に調和して生きている生き物たちの一員である、という意識が濃くあらわれている。ここに限らず、そのことを表わす記号は、例えば、海という小宇宙で出合った、いろいろな小鳥たちや魚たちへの彼の思いなど、この作品の殆ど至るところに見いだされる。ここにあるのは、「人類」に限定しない、以前よりも一層スケールの大きい、よりレベルの高い、全体への所属と調和、の意識である。

今、彼が求めているのは、何よりも、休息であり、ベッドが彼の友であり、とてもすばらしいものに思える。そして、今の彼は、敗れた時の気楽さ、と

いうものにも気づいている。それは、既に言及したように、以前と違って、謙虚になった、ということでもある。

It is easy when you are beaten, he [Santiago] thought. I never knew how easy it was. And what beat you, he thought.

‘Nothing,’ he said aloud. ‘I went out too far.’ (121)

老人と少年，との関係に代表されるように，この作品には，老いと若い生命との関係も，効果的なリフレインのひとつとしてくりかえされている。良く言及される「若い猫のようなライオンたち」も，後者の方の代表である。

「あの子がここにいてくれたらなあ」(I wish the boy were here.) という，Santiago の募る思い（この両者の間に同性愛の関係をみる解釈もある）のリフレインについては，すでに指摘したとおりだが，彼は，陸の上に帰ってきてからも，少年に向かって，素直に気持ちを打ち明けている。

He [Santiago] noticed how pleasant it was to have someone to talk to instead of speaking only to himself and to the sea. ‘I missed you [Manolin],’ he said. (125)

ここは，語り手の役割の部分には違いないが，明らかに，この老漁師の気持ちにぴったりと寄り添って語っている。語り手の視点と彼のそれとの間にズレはない。そして，ここに示されている，老漁師の気持ちと行為は，何とも人間的，である。（Brenner は，この Santiago の中に，必要な時に自分のそばにいてくれなかった Manolin に対する ‘filicidal wishes’ の深層心理を見ており，‘I missed you.’ という科白も，非難として聞いている）³⁰⁾

The Old Man and the Sea が，Mayers などがいうように「最も評価され過ぎている作品」(his most overrated work)³¹⁾ かどうかは暫く措くとし

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

て、少なくとも、Santiago は、これまでの大方の読み方のように、中世騎士道の体現者や神話伝説上の王や悲劇的英雄や超人や小説家 Hemingway 自身やイエス・キリストなどに読み替えるよりも、ありのままに素朴に、100パーセント漁師そのものとして読むほうが、より相応しいのである。

ありのままの彼は、巨魚との闘いに於ても、記号の読み間違いや的はずれの判断を重ねた。いや、巨魚とめぐり合う以前に、すでに、「極端な遠出」という過ちをおかしている。勇気も忍耐力もあるが、彼は、淋しがりやだ。独りぼっちで遠出をしたものの、愛弟子の少年をもとめ続ける。これは、後で 'I missed you,' と告白しているように、単に「助手」(少年の名前 Manolin は「手」の意味)としてだけ彼をほしがったわけではなかった。また、彼は、いろいろと弁解しながらも、生計のためとはいえ、友でもあり兄弟でもある巨魚を殺すことに、心のうずきを感じている。しかも、後で、巨魚を殺したのは、自己のプライドのためでもあった、ということを知っている。そして、この魚を引っかけたことを後悔する。彼は、老齡ゆえの力の衰えも認識する。巨魚を仕留める時には目に黒点がちらついたり、鮫たちと闘ったあと、錫の味のするものを吐いた。

超人とか英雄とかキリスト、という存在が、かくも多くの過誤を重ね得、かくも多くの人間的弱点を表わすものであろうか。

世にも美しかった巨魚が彼の過誤ゆえに、無残な残骸と化したとき、彼は、後悔することも、詫びることも、知っていた。

彼は、プロ野球のファンであり、引っかけた魚の肉の値段を計算する。

彼は、飛び魚やシイラや小鳥や海亀など、海の生き物たちに、自分もその同じ小宇宙の生きとし生けるものの一員として、慈しみのまなざしを向ける。

彼は、たしかに、功名心が強くて、一人で極端な遠出をする、というような一か八かの無謀な冒険をするが、大変な努力家であり、餌の設置の仕方ひとつとっても判るように、自己の本職にきわめて誠実である。目のために、他の漁師たちが嫌がる肝油を彼は飲む。だが、これまで列挙してきた理由からいっても、決して超人や半人半神などという存在ではなくて、人間として

の限界をもつ漁師として、他の漁師たちが試みようとはしない限界に挑み、過誤をおかしながらも、プロの老漁師として、自己の全能力を集中して、ブレイキング・ポイントまでも耐えぬく姿を見せている。超人でも王でも小説家でも騎士でもキリストでもなくて、一介の老漁師だから、それは、より一層、すがすがしい感動を呼び起こすのである。

彼は、他の多くの漁師たちとはだいぶん違う点はあるが、それも、誤りをおかしやすい人間としての枠（限界）内でのことである。

いうまでもなく、普遍性の強い、すぐれた作品の常として、老漁師そのものの Santiago が、読者にとって、‘metaphor’ 化する、という消息はある。

但し、その ‘metaphor’ は、読者それぞれの内面とのかかわりに応じて、千差万別のものとなるであろう。

そして、20世紀のコンテクストの中では、例えば、Leopold Bloom³²⁾ と Odysseus の関係は、それがアイロニーの方法となるときに初めて成り立ち得るのではないか、ということを付言しておこう。

注)

- 1) Carlos Baker (ed.), *Selected Letters 1917-1961* (UK:Panther Books Granada Publishing Ltd, 1981), p. 780.
- 2) Philip Young, *Ernest Hemingway* (London:G. Bell & Sons Ltd.,1952), p. 98.
- 3) Stanley D. Price, *Santiago, The Fisherman-Artist* (Michigan:A Bell& Howell Information Company,1992), p. 83.
- 4) Leo Gurko, *Ernest Hemingway and Pursuit of Heroism* (NY:Thomas Y. Crowell Co., 1968) p. 167.
- 5) Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea* (London:Jonathan Cape, 1952), p. 5.

今後のこの text からの引用部分のページは、各引用の末尾に、() 内の数字で示す

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

- 6) Sheldon N. Grebstein, *Hemingway's Craft* (USA:South Illinois University Press, 1973), pp. 89-91.
- 7) Cf., *ibid.*, pp.126-128.
- 8) *IL NOME DELLA ROSA* : 記号論学者 Umberto Eco の小説。中世イタリアの僧院内で起る、自殺とも他殺とも考えられる連続変死事件の謎を、イギリス人のフランチェスコ会修道士 William が、かずかずの記号を読み解くことによって説明する。
- 9) Grebstein, *op cit.*, p. 43.
- 10) Robert M. Hogge, *Hemingway's Twentieth-century Medievalism* (Michigan:A Bell & Howell Information Co., 1992), p. 93.
Thomas T. Barker, *The Stoic Ideal in Hemingway's Fiction* (Michigan: University Microfilms International, 1992), p. 172.
- 11) Cf., Carlos Baker, *Ernest Hemingway, a Life Story* (NY:Collier Books, 1969),pp. 16-17.
- 12) John Killinger, *Hemingway and the Dead Gods* (NY:The Citadel Press, 1955), p. 24.
- 13) Cf., Raymond S.Nelson, *Hemingway:Expressionist Artist* (Iowa:The Iowa State Univ. Press, 1979)
Cf., Robert O.Stephens, *Hemingway's Nonfiction, The Public Voice* (USA: The University of North Carolina Press, 1968), p.233.,. . . the free museum was a powerful teacher. . .
- 14) Price, *op. cit.*, p. 51.
- 15) Gerry Brenner, *Concealments in Hemingway's Works* (Columbus:Ohio State Univ. Press, 1983), p. 185.
- 16) Jeffrey Mayers, *Hemingway* (London: Pladin Grafton Books, 1985), pp. 479-482.
- 17) Brenner, *op. cit.*, p. 181.
- 18) *ibid.*, p. 183.

- 19) *ibid.*, pp.180-181.
- 20) Price, *op. cit.*, p. 130.
- 21) Hogge, *op. cit.*, p. 93.
- 22) Killinger, *op. cit.*, p. 17.
- 23) Grebstein, *op. cit.*, p. 91.
- 24) Young, *op. cit.*, pp. 100-101.
- 25) Mayers, *op. cit.*, p. 489.
- 26) A. Pope, *An Essay on Criticism* (525)
- 27) Brenner, *op. cit.*, p. 187.
- 28) Stephens, *op. cit.*, p. 312.
- 29) Killinger, *op. cit.*, p. 81.
- 30) Brenner, *op. cit.*, pp. 186-187.
- 31) Mayers, *op. cit.*, p. 488.
- 32) Homer の *Odyssey* を下敷きにした, James Joyce の代表作 *Ulysses* の主人公

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

How I Wonder What You Are, Sr Santiago!

—A Discourse with Three Refrains as Its Cues—

Hiroaki Dehara

Hemingway tried to pursue something truly universal in *The Old Man And The Sea*.

Apparently the title is more equivocal, comprehensive, less particularized, than such titles as *Santiago and the Sea* or *Santiago and the Marlin* would be.

This may be one of the reasons why there have been quite a few interpretations of Santiago as something other than the fisherman he is. For instance, according to Brenner, Santiago as King Oedipus commits incest with la mar as his mother, using the fish as his genital organ, and is punished. On the other hand, Price's interpretation is that Santiago is Hemingway himself as a writer, the fish being his work, and the sharks are critics. In another interpretation, Hogge sees the realization of medieval chivalry in Santiago. The story has also often been taken as an allegory.

Hemingway, however, denies his intention of symbolism, saying that the old man (in the work) is the old man, and the fish is the fish.

Santiago has been decorated by many critics with such splendid tags as 'superhuman', 'medieval knight', 'King Oedipus', and 'Jesus Christ'.

The purpose of this paper is to take the tags off him for a while and to try to read Santiago as a fisherman pure and simple. To do this, I picked out three refrains in the novella as cues. (As is well known, Hem-

ingway learned the technique of 'refrain' or 'repetition' from Gertrude Stein in his writer's apprenticeship in Paris.)

The refrains I have selected are as follows: 'he [Santiago] went too far out', 'I [Santiago] wish I had the boy here', and 'You're my friend but I [Santiago] must kill you, fish'.

The old man commits a lot of errors in his pursuit of the fish. First of all, he goes too far out, where he is alone with no sight of land, and of any other fishermen. The marlin he has hooked, when it comes out of the water for the first time, tells Santiago that it is two feet longer than the skiff. That is, it is impossible to take the fish aboard. Then why doesn't he realize that it is bound to be attacked by sharks on his long voyage home?

His justifying excuse, 'I must kill you, fish, because I am a fisherman', changes into an apology, 'I shouldn't have hooked you. I 'm sorry, fish', when he is exposed to the shark's forays. The old man fails more than twice in judging when the fish will come up, so his fight with it actually takes much longer than he expected.

He repeatedly wishes the boy were with him during his fight with the fish, and that with the sharks, and he confesses to him, 'I missed you', after he returns home. That is, the old man needs the boy not only as a helper but also as company.

The old man, Santiago, is more convincing as a human being than as a superhuman being. He commits a lot of mistakes — as A. Pope says 'To err is human, to forgive, divine.' —, and, alone on the sea, he misses the boy. His being typically human endorses that he is a human fisherman, not a superhuman being, nor a legendary king, nor Christ.

It is true that Santiago is not as ordinary as other fishermen. First of all he is more ambitious for honour and applause, and adventurous.

きらきら、海のSantiagoさん、あなたはいったい何かしら？

With more gifts and faith he makes every effort to be an ideal fisherman, though he is not always successful. He tries to endure till he is on the point of collapse.

His sportsmanship is without question here, and meaningful.

The old man's manly, stoic attitude toward the tragic result is quite contrary to that of the nameless Cuban fisherman who was crying in the boat when he was picked up, half crazy from the loss of his great marlin, eaten up by sharks. Though the latter's experience was the source of this literary masterpiece, the author apparently idealized his fisherman. However much as he may have idealized Santiago, he did not go so far as to make him anything other than a human fisherman. The old man, Santiago, is undoubtedly no more than human being, but in extreme situations, he fights, as a representative human being with excellent gifts and human defects as well, to the extent of going beyond his limits. And he also accepts the result of his fight with both grace and pride as a man.

These are what make Santiago as well as the story itself so charming, moving, and encouraging to us.